

氏 名	大橋 尚弘 (おおはし たかひろ)
学 位 の 種 類	博士(看護学)
学位授与番号	甲博看第3号
学位授与年月日	令和4年3月2日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	成人腎移植後レシピエントのセルフマネジメントを支援するための評価ツールの開発 (Development of an Assessment Tool to Support the Self-Management of Adult Renal Transplant Recipients)
論文審査委員	(主) 教授 荒木 孝治 教授 赤澤 千春 准教授 カルデナス 暁東

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

《緒言》

腎移植後は移植片拒絶や移植後糖尿病、移植後高血圧などのリスクに加え、移植による情緒的影響、社会的役割の変化などの課題が存在する。移植後長期にわたって身体的、心理社会的に高い QOL を維持するためには、レシピエントがセルフマネジメントを網羅的かつ継続的に行う必要がある。しかし、移植後の日常生活の中でレシピエントがセルフマネジメントをそのように行うことは容易ではないため、医療者はレシピエントが充実したセルフマネジメントを行えるよう定期的に支援する必要がある。

本研究は、レシピエントが移植後に必要なセルフマネジメント行動をとれているかを服薬などの一部の領域に限らず幅広く評価でき、そして、セルフマネジメントにおいてレシピエントが陥りやすい行動を評価できるツールの開発を目指した。

《目的》

腎移植後レシピエントのセルフマネジメントの現状について報告している先行研究をレビューし、その結果をもとに「腎移植後レシピエントのセルフマネジメント行動評価ツール(案)」を作成する。また、修正デルファイ法を用い、評価ツール(案)の内容妥当性について検証する。

《方法》

医中誌 Web(Ver.5)、CINAHL(plus)を用いて国内外の文献をレビューし、腎移植後レシピエントの服薬、身体的側面、心理社会的側面のセルフマネジメントの現状と課題に関する知見を整理した。その後、その結果を基礎資料とし、KDIGO Clinical Practice Guideline for the Care of Kidney Transplant Recipients や浅井ら(2017)によるセルフマネジメント行動の分類を参考に、腎移植後レシピエントのセルフマネジメント行動評価ツール(案)を作成した。

次に、修正デルファイ法を用い、レシピエントのフォローアップに精通した専門家を対象として、レシピエントのセルフマネジメント行動の評価項目に関する調査を行った。専門家は0～9段階のリッカート尺度を用い、各項目の適切性、妥当性を評価した。専門家からのコンセンサスの評価は中央値、四分位範囲、四分位範囲率を算出して行った。第3ラウンドでは項目の内容妥当性を評価するため、これらに加え、Item-level content validity index(以下、I-CVI)を算出した。

《結果および結論》

「服薬」、「運動」、「水分・栄養」、「疾患・症状の予防と管理」、「心理社会的適応」の5領域からなる腎移植後レシピエントのセルフマネジメント行動評価ツール案を作成し、3ラウンド(質問紙調査3回、ミーティング調査1回)の修正デルファイ調査を行った。質問紙調査では15施設17名の専門家の協力が、ミーティング調査では14名の協力が得られた。3ラウンドの調査の結果、41項目の適切性および妥当性が「中央値7点以上、IQR1以下、IQR80%以上」または「各協力者による評価の最小値が7以上」のコンセンサス基準を満たした。また、そのうち25項目のI-CVIは1.0、16項目のI-CVIは0.80以上であり、「I-CVI $\geq$ 0.80」のコンセンサス基準を満たした。

結果として、実施程度の低さが報告されている「口腔粘膜を損傷しないような歯磨き」や「定期的な歯科受診」、支援が不十分になりがちな心理社会的適応領域のセルフマネジメントの項目を含む、41項目について専門家のコンセンサスが得られ、内容妥当性が適切であることが示された。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

研究者は腎移植後の患者(以下、レシピエントとする)のセルフケアマネジメント行動評価ツールの開発を目指し本研究に取り組んだ。第1部(副論文)ではレシピエントの服薬マネジメントをめぐる国内外の研究の動向について文献研究を行なった。レシピエントは免疫抑制薬に加え降圧薬や血糖降下薬など多種類の薬剤を多数服薬しているが、アドヒアランスありと評価されているレシピエントも「医師の指示時間/用法/用量の遵守」や「免疫抑制薬の自己判断による減薬」等、一部の項目においてノンアドヒアランスの状態にある可能性が示唆された。第2部は、レシピエントの身体的側面のセルフマネジメントに関する国内外文献レビューであり、レシピエントが運動習慣の維持、野菜や果物の摂取、炭水化物や総脂質、食物繊維や微量栄養素の適切な摂取、適切な血圧測定や体温測定、歯科受診などを十分に行っていない可能性が示

唆された。第3部(主論文)において研究者は上記の文献研究の知見を基礎資料とし、又、KDIGO Clinical Practice Guideline for the Care of Kidney Transplant Recipients 等によるセルフマネジメント行動の分類を参考に、「服薬」、「運動」、「水分・栄養」、「疾患・症状の予防と管理」、「心理社会的適応」の5領域からなるレシピエントのセルフマネジメント行動評価ツール(案)を作成した。そして、3ラウンド(質問紙調査3回、ミーティング調査1回)に渡る修正デルファイ法により同ツールの項目の適切性、妥当性を検証した(質問紙調査では15施設17名の専門家の協力、ミーティング調査では14名の協力を得た)。0～9段階のリッカート尺度を用い、コンセンサス基準を「中央値7点以上、四分位範囲(IQR)1以下、IQR80%以上」又は「各協力者による評価の最小値が7以上」と設定した。その結果、実施程度の低さが報告されている「口腔粘膜を損傷しないような歯磨き」や「定期的な歯科受診」、支援が不十分になりがちな心理社会的適応領域のセルフマネジメントの項目を含む41項目についてコンセンサスが得られた。

研究者は綿密な文献研究を基にレシピエントのセルフマネジメントの行動評価ツールの開発を行ない、修正デルファイ法を用い適切性、妥当性の検証に努めた。更に第4部において、レシピエントにとって適切な活用方法の検討の必要性に関する詳細な言及が見られる。これらの点から本研究には独創性、研究成果の応用面での意義、結果の発展性が認められる。

以上により、本論文は本学大学院学則第13条第3項に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Health, 14(1), 70-95, 2022